

いちじょうだにあさくらしいせき
7. 一乗谷朝倉氏遺跡

(第150次)

所在地：福井市安波賀中島町

調査原因：一乗谷朝倉氏遺跡博物館（仮称）整備

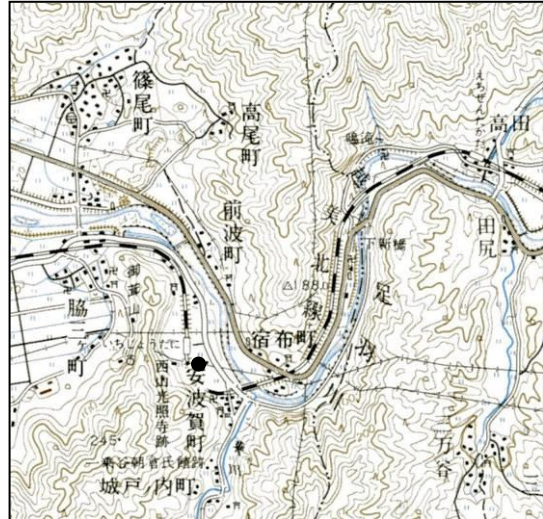
調査期間：平成29年5月22日

～平成30年3月28日

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：5,500 m²

時代：中世・近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 第150次発掘調査の対象地は、一乗谷朝倉氏遺跡博物館（仮称）の整備が計画されている約1万m²で、福井市安波賀中島町に所在します。隣接する安波賀町も含めたこの一帯は、戦国時代、都市一乗谷と外界との接点であり、当時の文献には「越前一乗の入江、唐人の在所」「一乗阿波賀在所」と記載されています。そこは船着場の周辺に倉が並ぶような川湊と意識され、唐物の売買さえも盛んな流通の町、大きな商業地であったことがうかがえます。さらに、「阿波賀見物」と称する繁華街の見物も行われたようです。

平成28年に博物館整備予定地全域を対象に実施した試掘調査では、整備予定地の中央を南北に走る市道をはさんだ西側（JR越美北線側）で石垣と濠が、東側（県道側）で流路（旧河道）がみつき、いずれも朝倉氏の活躍した戦国時代のものと考えました。これらのうち、石垣と濠については、三代国主の朝倉貞景が一向一揆との合戦における敵味方の亡魂供養のため阿波賀に建立したとされる「経堂」の一部ではないかと推測しています。濠のなかからは「一念弥陀佛即滅無」と書かれた木簡が出土しています。

一方、市道東側で確認した流路については、石垣や濠のすぐ横を走っていることから、それらと一体的に利用された可能性があり、何らかの遺構が付属することも想定できました。また、この流路が埋まった段階で、東側の岸に沿うように溝が掘られており、これも戦国時代か、下っても江戸時代初期までのものと考えました。市道東側の地区ではこのほかに、江戸時代中ごろの土坑（ゴミ穴など）を検出しています。

以上の試掘結果をもとに市道東側で展示・ガイダンス棟の建設が計画されたことから、その約5,000 m²を本調査の主な対象範囲とし、駐車場整備が計画された市道西側については一部補足的な調査を行いました。

本調査の結果、市道東側で戦国時代から江戸時代にかけて少なくとも5時期の遺構を確認することができました。以下ではその成果を中心に説明します。

遺構と遺物 新しい時期の遺構面から順に第Ⅰ～Ⅴ面として記述します。

【第Ⅰ面】水田の床土直下で検出した土坑9基や井戸1基、石積施設1基などがあります。土坑は直径0.6～1.5mほどの円形で、伊万里焼やキセル、硯などが出土しました。また、上述の試掘調査で検出した土坑では、灯明皿に使われた土師質皿（かわらけ）がまとめて捨て

られていました。井戸は穴の周囲にしっかりと石を積み上げたもので、直径は内法で1.2m、深さは3.0mもあります。石積の下には胴木が方形に組まれていました。溜樹と考えられる石積施設は、平面が舟形の特異なもので、長さ2.0m、幅0.8mで、深さ0.4mをはかります。これらの遺構は出土遺物から17世紀末～18世紀前半に位置づけられます。

【第Ⅱ面】石組溝1条のほか、水田や通路を区画したとみられる石列があります。これらに用いられる石材には石臼などの石製品が混在していました。

【第Ⅲ面】流路の東岸に沿って南北に延びる溝および調査区南端近くでこれに接続する東西方向の溝、さらにそこから枝分かれして南へ延びる溝の各1条があります。いずれも素掘りで、土器や陶磁器のほか、下駄や漆器、編物、動物の骨、植物の種などが出土しています。また、土を分析したところ、寄生虫の卵が多く見つかりました。建物などの遺構はみつかりませんが、溝沿いで人々が生活していたことがうかがえます。そのほか、この時期の可能性のある遺構として、調査区北東隅で検出した濠状の遺構があります。東側は調査区外へ延びていますが、検出長8.0m、幅6.0m、深さ1.5mと大規模なものです。埋土は下半分が粘質土、上半分が砂質土であり、下半分が埋まった段階で南西隅を斜めに横切るように石積が構築されています。

【第Ⅳ面】流路を横切るように構築された石敷遺構です。流路下部が埋まった段階で構築されています。大小の川原石が大量に用いられており、幅5m、長さ35mをはかります。南辺は一段低く、縁には直線的に石が並んでいます。北縁にも直線的に石が並べられていたようですが、多くはなくなっていました。また、両端と中央付近に直交する溝がつくられています。そのうち、中央付近の溝上部から緡銭（さしぜに）が出土しました。石敷遺構の西端は途切れていますが、市道西側の調査区において、同じ方向に延びる盛土状の高まりが確認でき、「経堂」に取り付いていた可能性があります。一方、東方には砂利敷きの道路があり、これに接続したものと思われる。

【第Ⅴ面】南北に走る流路で、最大幅35m、深さ1mをはかります。いつ頃できたものかを判断できる遺物は確認していませんが、戦国時代もしくはそれ以前にさかのぼるのは間違いありません。埋土は湖沼や湿地の堆積を示す粘土～シルトが主体ですが、薄い砂礫層をはさむ箇所もあり、時には水が流れることもあったようです。

各遺構面の時期については、第Ⅰ面と第Ⅱ面が江戸時代、第Ⅲ面と第Ⅳ面を戦国時代、第Ⅴ面を戦国時代もしくはそれ以前と考えています。遺構面の形成過程をみると、第Ⅳ面の石敷遺構が構築された段階で流路の下部はすでに埋まっており、第Ⅲ面の遺構が構築された段階では完全に埋まっていたとみられます。その後、第Ⅱ面の遺構は、洪水などにより砂が堆積した後に構築されています。また、第Ⅱ面の遺構も洪水砂で覆われており、その上に第Ⅰ面の遺構がつくられています。その際、焼け土や炭、戦国時代の遺物が多く混じる土で整地がおこなわれたようです。

まとめ 今回の調査で検出した流路とそれを横切る大規模な石敷遺構は、文献にみえる「越前一乗の入江」の一角と想定しています。石敷遺構が何のためにつくられたかなど、解明すべき課題はたくさんありますが、戦国時代の「阿波賀」を知る大きな手掛かりとなることは間違いありません。 (田中祐二)



主な遺構の配置 (市道東側調査区)



第I面 井戸（南より）



第I面 石積施設（南より）



第II面 石列（西より）



第III面 濠状遺構（東より）



第IV面 石敷遺構（西より）



緡銭出土状況（北より）